ナシ新品種「恵水」の品質と収量性が優れる適正着果量の解明

農業総合センター園芸研究所

茨城県オリジナル新品種「恵水」は、平成25年度から現地への導入が開始され、生産者と関係機関が一丸となりブランド化に向けた生産販売戦略の検討を進めています。園芸研究所では高品質多収穫生産を目指した樹体管理や栽培技術の開発に取り組み、重要な管理技術のひとつである適正着果量を明らかにしました。

品質と収量性が優れる着果量

成木において、着果量を樹冠占有面積1㎡当たり10果とすることで、一果重が500g以上の大玉果の割合が60%前後で糖度13%以上の果実が安定して確保でき、収量4.5トン／10a程度の高収量が得られることを明らかにしました。

着果量8果／㎡では一果重は大きいものの収量は少なく、12果／㎡では収量は多いものの一果重が小さく、糖度のバラツキも大きくなり、品質が不安定でした。

「恵水」の現地検討会の様子

「恵水」の普及拡大に向けて

平成27年度までの現地への苗木導入本数は約2,500本、栽培面積は6.7haに普及拡大しています。

これまで、消費者評価を兼ねた試験販売を行ってきましたが、生産量の増加が見込めるため28年度からは市場出荷が始まります。

今後も高品質多収穫生産に向けて研究で得られた成果については、栽培マニュアルに反映し技術の体系化を図っていきます。

「恵水」の結実状況

着果管理のポイント・留意点

実際の着果管理は、結果枝（成らせる枝）単位で考え3芽に1果の着果、結果枝1m当たり5～6果程度を目安にします。これにより、樹冠が完成して結果枝を十分に配置できる成木では、樹冠占有面積1㎡当たり10果の着果量が確保できます。

特に、樹冠拡大中の若木は、十分な結果枝数を確保することができないので、結果枝単位での着果量を優先させることが重要です。

試験販売の様子